

番 号	10330
効用の種類	ふれあいによる生理・心理的効用(ブラジル:花瓶制作およびフラワーアレンジメント)
タイトル	The Flower Workshop in Psychosocial Rehabilitation: A Pilot Study 心理社会的リハビリテーションにおけるフラワーワークショップ: 試験的研究
概 容	統合失調症の患者へフラワーワークショップを実施し、その活動の効果を検証する。その結果、12名の患者全員が花瓶制作およびフラワーアレンジメントを完成させることができた。この活動により、患者らが不安の感情をコントロールして自己表現を行い、難しいとされた他のメンバーとの社会的かかわりを改善することができた。また、フラワーワークショップは、低コスト、運搬の簡易さ、材料の豊富さ、常に専門家の指導が必要ないことから特にブラジルの公共の健康支援に有効である。
内 容	<p>(目的) 社会心理的な新しいリハビリテーションとして、フラワーワークショップについて試験的研究を行った。フラワーワークショップが統合失調症やその他の精神病を抱える患者の部分的に損なわれた脳の活動を一時的に改善すると仮定し、自己形成と間主観的なコミュニケーションの過程における一つの重要なステップとしてその活動を行った。</p> <p>(調査方法) 12人の患者に対してフラワーワークショップを行った。一回の所要時間は1時間半とし、初めに患者をリラックスさせるために軽い運動を行った。運動の後、花瓶を作る材料を患者が選び花瓶を作成し、その後自由に花を選んでもらいそれらを給水スポンジを入れた花瓶に生けた。アレンジメントの完成後は、社会的な活動として患者が作ったアレンジメントをグループの他の人々に見せたり、他の人が作ったアレンジメントを観察したりした。この間、コーディネーターが各患者に作業中の感覚、感情、記憶、作品に関する考えを聞いた。ワークショップの最後に、コーディネーターは専門家グループと、患者のワークショップ参加について討論した。</p> <p>(結果) すべての患者が、自分の作品を作成することができた。この活動は、彼らの感情の表現やそれを詳しく述べることで、グループの他のメンバーとの社会的交流を可能にした。このワークショップは、このような社会的交流がうまくいかない原因となる不安や心配といった感情をコントロールする機会を与えたと思われる。</p> <p>患者Aさん(54歳男性)は、普段は緊張病で寡黙、受け身、意気消沈した状態であり、聞かれたことにしか反応しなかったが、彼のアレンジメントは緻密で美しく明るい。アレンジメント作成は、Aさんのグループでのコミュニケーションに貢献したと思われた。作業の終わりにコーディネーターに感想を聞かれ、少しの言葉ではあったが満足感を述べた。彼は自分の作品をいつもホールに置いた。</p> <p>患者Bさん(58歳女性)は、毎回活動に参加したが、人とコミュニケーションとるのがかなり難しい状態だった。初回は、他の人が彼女のためにアレンジメントを作ってくれると待っていたが、次の回には自主性が始め、自分で花を選ぶことができた。徐々に仲間との会話ができ始め、</p>

	<p>最終回ではBさんはつねに自分の家族についての話をし、作品を自分の甥のところや母の墓に持っていった。</p> <p>患者Cさん(47歳男性)は、多動症で集中することが難しく、初回では花瓶作成までは作業ができたがアレンジメントは完成させられなかった。しかし二回目にはアレンジメントを完成させることができ、最終回では時間内に終わらせた。彼はいつも、花瓶や花に黄色を選び、この色が自分に喜びを与える、と語った。彼は自分の作品を信頼するスタッフにプレゼントした。</p> <p>患者Dさん(49歳男性)は、はじめのワークショップへの招待を即座には受けなかった。しかし、他の参加者に続いて活動場所に入ってきた。彼はこれを5回繰り返した。そして5回目にコーディネーターが改めて誘うと、彼は喜んで参加したいと言った。彼は、寡黙で、内向き、低い声で話すが、他のメンバーとの関係は良好であった。彼の最初の作品は、花瓶の色は強い色調で、花も鮮やかなものだった。彼は時々、アレンジメントを作るとマイナスな思考から逃れられる、と語った。また彼は、花をよく見て作品の完成を熟考し、上手に出来たと考えるのが好きだった。作品は彼の姉にプレゼントされた。</p> <p>(考察)</p> <p>ワークショップは、感覚的で象徴的な側面以外は他の心理的療法における活動と本質的には違いがない。しかし、ワークショップは低コスト、移動が簡単な活動である、新しく材料を揃える必要がない、専門家の指導が数回あれば後は専門家なしで参加者だけで活動できる、といった点において、ブラジルの公共の健康支援には特に適していると思われる。参加者のうち統合失調症ではない8名の医療診断と彼らの参加の詳細はここには述べていないが、ワークショップの終わりに行った議論では、すべての参加者に明らかに同じように効果があったことが専門家の間で確認された。</p> <p>ワークショップは、患者の生理的な脆弱性を安定させるのに適切であり、社会心理的リハビリテーションを提供する新しい手段との関連において成功であったと考える。それはまた、作業の中で参加者の認識の一致に役立ち、感情の結びつきを発展させるような社会的環境を作る。ワークショップは、統合失調症の患者、統合失調症以外の患者のための健康支援における様々な状況で有効である。</p>
<p>出典</p>	<p>Alfredo Pereira, Jr. and Maria Alice Omellas Pereira Mental Health Nursing,30:47-50, 2009</p>
<p>備考</p>	